



SEM RUBIO

Photographer

スケート&ムード。
見慣れた街が新しい色合いを見せる。

セム・ルビオというフォトグラファーと初めて出会ったのは
adidas Skateboardingがグローバルキャンペーンで来日を果たし
東京と大阪をツアーで回った2008年のこと。
2005年から同ブランドのヨーロッパチームを撮り始め
その力強い作品に目が留まりジャパンツアーに召喚された。
それ以来、adidas Skateboardingのツアーには
無くてはならない存在に。
チームとともに世界を旅してきた中で日本を訪れたのは合計3回。
限られた滞在期間で名だたるスケーターたちと協力しながら
キャプチャーしたライディングショット
そして主に東京で切り取られた私的作品の数々をお届けする。

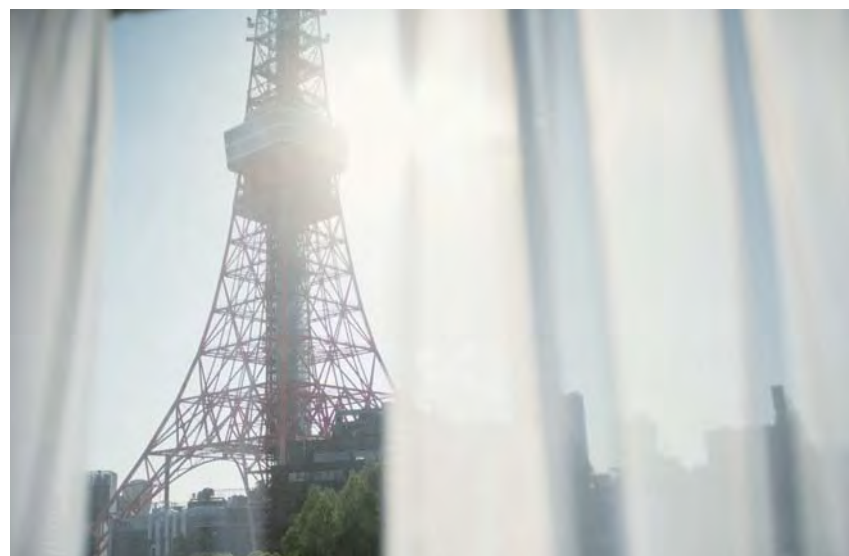
text:Masafumi KAJITANI

セムが初めてadidas Skateboardingととも
に来日を果たした2008年に撮影された
ショット。ネスター・ジャドキンスによる
バックノーズブラント。



(左) “RÖZU”に収録された、デニス・ブセニッツによるBsノーリーヒール。(右)大阪のレジでマイルス・シルヴァスが魅せるバックノーズグラントのポップアウト。

「何かを訴えかけられる写真を残すことができる。日本、特に東京は特別で不思議な街」



「東京では何気ない瞬間が特別な風景になる」とセムは言う。限られた滞在期間の中でさまざまな私的写真を取り続ける。日本の首都の象徴である東京タワーもその最たる例。

セム・ルビオというバルセロナ出身のスケーターがフォトグラファーに転身したのが2000年。大怪我で戦線離脱を余儀なくされ、前線で活動する仲間たちと関わり続けたいと思いカメラを手にとった。2002年に初めて自身が撮った写真がスケート誌に掲載され、2004年にKingpinのスタッフフォトグラファーに就任。「フォトグラファーとしての転機となったのは2008年にadidas Skateboardingのジャパンツアーに呼ばれたこと。それから『Away Days』のプロジェクトが始まるまでの6年間、毎年グローバルキャンペーンの一環としてツアーに同行するようになった。彼らはフォトグラファーとしてのスタイルをリスペクトしてくれて自由に表現させてくれる。生産的に動くためには、

自分のクリエイティビティを発揮できるスペースが必要なんだ」

そのクリエイティビティが顕著に見られるのが、本特集内に見開きで掲載されているグスタフ・テンネセンによるライディングショット。このショットはビルの5階から狙われたもので、奇妙なアングルのためにスポットがどのようにになっているのか、グスタフがどのようにスポットを攻略しているのか容易く解説することができない。その答えは敢えて明かさないが、ずっと写真と向き合いながら、あれこれ想像が掻き立てられる写真。

「日本、特に東京は特別で不思議な街だ。人が多いし刺激だらけだけど、同時に妙に静かで孤独な感じもする。東京ではスケートの撮影がメインになるけど、時間を見つ

けて私的な作品を撮るようにしている。中でもいくつもの傘に埋もれた女性の写真が気に入っている。これこそ、オレがつねに求めているイメージ。特定の女性を撮ろうとしたわけでもなく、センスや構図とかいう問題でもなく、記録写真でもない。言い方は何でもいいいけど、何かを訴えかけられる写真を残すことができる。それが東京という街の魅力だと思う」

現在はロドリゴ・TX、チューイー・キャンやルシアン・クラークなどが名を連ねるJLB(Jet Lag Brothers)という新たなブランドのビジュアルを撮影しながら、友人が手掛ける映画『Bronko』とのコラボレーションを進めているとのこと。そして、この10年で度々ツアーをともにしてきたマーク・ゴンザレスとの私的プロジェクトもつ

い先日スタートしたばかり。以上のプロジェクトが形になるまでは、セム・ルビオが日本で撮影した写真をご覧いただきたい。見慣れたはずの風景が、いつもと少し違った色合いを見せ始める――。



Sem Rubio

スペイン・プラネス在住。強靱なポップを誇るスケーターとしてバルセロナを拠点に活動するも怪我によりフォトグラファーに。adidas Skateboardingと数々のクラシッな作品を残しながらヨーロッパのシーンを支え続けている。



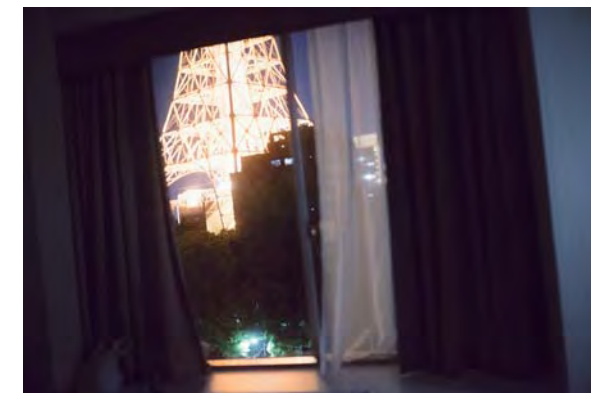
グスタフ・テンネセンがラフなウォールに当て込む。ヒルの5階から撮影された、想像を掻き立てるイリュージョン。これをセムのスケート写真の面白さ。



グローバルキャンペーンのメインビジュアルとしても採用された1枚。東京の有名レτζで魅せるトレフリップからのノーズスライド。ディエゴ・ナヘラの超人的なボードコントロールと洗練されたスタイルが光る。

ノルウェー出身、北欧を代表するキング・オブ・ポップ、マグナス・ボードウィックがパンクから魅せるFsウォールライド。やはり高さのあるトリックがこの男のトレードマーク。ちなみにこのトリックも“R O Z U”に収録。





グスタフ・テンネセンによる50-50のポップアウト。ツアー中は昼から晩まで、街に点在するスポットを次々とヒット。この夜の餌食となったのはタイトなバンクからのレール。ここ最近、グスタフの活躍ぶりが目を引く。

セキュリティが厳しい東京のスポットは夜に攻めるのがベスト。adidasきってのファッションISTAとして知られるブロンディ・マッコイがクイックナイトセッションでプラントをさりりと仕留める。

